

きりゅうがわりんぎょうけんきゅうかい  
桐生川林業研究会

群馬県桐生市梅田町1-757

代表者 青木好雄

設立 昭和42年8月

会員 男6人

年齢 46歳~63歳 平均56歳

主なプロジェクト

- 森林から住まいまでの顔の見える関係を大切にする。
- 葉枯らし材積み乾燥による民家型構法建築への材の供給システムの確立と地域材利用の普及活動

## ぐんま森林と住まいのネットワーク

### 1. 地域の概要

上毛カルタに「つる舞う形の群馬県」という一枚の札があります。群馬県はちょうど、鶴が羽を広げて飛んでいるような形をしており、左羽の付け根の部分が私たちの地域であります。鶴の頭、首の部分は関東平野の一角で、館林・太田・伊勢崎で木材の消費地であります。

地味は比較的肥沃で秩父古成層に属し気候も温暖で古くからスギ・ヒノキの造林が盛んでした。

群馬県では西の鐮川、御荷鉾林業地・東の桐生川林業地として知られております。

私たちの梅田町は95%が森林で昭和29年に桐生市と合併し桐生市のおよそ面積の6割をしめ、桐生川を挟んで約18km弱の細長い地域であります。

## 2. 単位林研の現在の状況

私は桐生川林研に所属しております。林研会員は桐生川の上流から下流まで点在し、5名が専門林家で頑張っておりますが、県下でも珍しい単位林研となってしまいました。今まで頑張ってきたのも林研の仲間がいたからだと思います。専門林家にこだわってきたからこそ現在の木材価格の下落に対しての悲壮感は並々ならぬものがあります。

林研活動として林業技術の修得、森林のボランティアの受け入れ、子どもたちへの林業体験教室等々の活動をしてきましたが、それが直接問題の解決にならず、あきらめムードと何とかしなければならぬ、の入り混じった心境でありました。

地域材の家造りの活動が少しずつであります但各地で報告され、桐生川林研も会議を持ちましたが一歩踏み出すことがなかなかできずにおりました。

同じくして、依然から交流がありました、単位林研を越えての林家・設計事務所・大工・行政事務所森林部の6名で桐生市街のトンカツ屋の2階で第1回目の会議を持ったのが我々の忘れられない思い出の場所となりました。ぐんま森林住まいのネットワークの第一歩であります。以後は桐生川林研ではなく「ぐんま森林と住まいのネットワーク」について話しを進めさせていただきます。

## 3. ネットワークの設立について

トンカツ屋の2階で第1回目の会議を持って以来、月に1度のペースで1年半、意見のすれ違いから一時中断したこともありましたが、約20回の会議を持ちました。会議は午後6時に集合し弁当を食べながら情報交換、雑談から始まり、段々と9時頃から話しが盛り上がります。公的な会場は9時で閉館ですから近くのファミリーレストランに場所を変え、11時過ぎても話は尽きません。

会議の多くは会の理念と木材供給システムに時間をかけました。最後に会の年間目標棟数は「20棟にしようか」と設計士さんからの提案があ

りましたが、山側からの提案で半分の10棟に落ち着きましたが決定した時は夢が見えてワクワク胸を踊らせて帰宅したことを今でも鮮明に覚えております。また、その逆もありの繰り返しでした。

それぞれの置かれた立場を理解することは簡単ではありません。まずは森林から住まいまで全体をお互いが見えなければ共通認識が生まれな  
いわけです。

会の理念、木材供給システムが決定され6名が発起人となり桐生川林研でなく、東材の家造りの会でなく、沢入林研でもない「ぐんま森林と住まいのネットワーク」として設立総会を開き新たに会員を募りました。

#### ○ぐんま森林と住まいのネットワークの設立総会（平成14年8月）

理事、幹事、会員の構成

森林所有者（4名）、製材業者（2名）、設計士（4名）、ユーザー（1名）、東部木材センター（1名）

会 員（60名）

#### ○会報の発行年2回・ホームページの作成

- ・出前講座（家の模型）
- ・看板の作成

#### 4. 会の理念

- ・国際化時代。グローバル化はローカル化。厳しくなればなるほど地域の資源や資産に目を向ける。それが国際化に抵抗すること。
- ・顔の見える関係を大切にする。分業をすることで全体が見えなくなっている。森林から住まいの連携する普段の関係を深めることがいろいろな難しい問題を突破する条件をつくる。全体が見えて、地域材振興の方向も見えるのではないか。
- ・近くの山の木で家を造る運動。（産直在宅と違う）地域の木材資源を活かす運動でコスト競争に勝ち抜くことではない。
- ・市場原理の追究から生命の原理追究へ。物から人へ、モノより人の健康や人の命の方が大切。また、市場で価格が決定されるだけでな

く、山元立木価格が算出されても良い。

- ・少量多品目。多量生産、多量消費、大手ハウスメーカー、工業化社会の創造との違いを明確にする。技術文明の成熟期は全く反対な、多様化、小規模化、複合化、自然と調和のとれた社会の創造が始まっている。
- ・森林や環境の保全を第1に。林業は自然の中の職業、環境との係わりは不可欠、ミスマッチな環境と経済をどのように両立、経済の合理性の追求から木の合理性の追求

## 5. 木材の供給

葉枯らしや栈積みはコスト低減の声に押されて激減し、時間をかけるゆとりが失われた。その結果、建築用材としては不適格な材が市場に出回り、ムクの材の信頼性が失われた。

昔は大工の技術が木のくせを利用し、逃していた。伝統木造建築技術との連携

### イ. 葉枯らし材

切り旬を守る。期間は約3カ月以上で含水率80%が目標（生木は100～200%）

伐倒方向は山側に倒す。

製品の色、つやが良くなり、狂いが少なくなる。木部を見せた民家型には欠かせないデンプン質が少ないため、虫、カビの心配が少ない。

### ロ. 栈積み乾燥

期間は柱で6カ月（4寸×4寸の柱）、含水率は20%に近づける。

### ハ. 民家型構法の建築に主に材を供給する。

建築家と交流がなければこの建築構法との出会いはなかったと思います。（昭和59年春、晴海で開催された国産材モデルハウス、林野庁が建築家の藤本昌也氏と田中文男氏に依頼、20年経過し建築家の間で支持する人が増えつつあり、節はあるが太い材、厚い板のスギを主体に使用し釘や金具を用いない、素朴であるが信頼性の高いモデルハウス）

## ニ. 原木・製品価格・葉枯らし価格・棧積み価格・製材価格の決定。

年度ごとに見直し、価格決定のすり合わせには多くの時間がかかったところでもある。通称「クドッチ」ソフト（県職の工藤氏作成）によりそれぞれの条件に合った価格が分かるようになっている。

## ホ. 材のストック

葉枯らし、棧積みにかかる時間がかかるため急な需要に応えるためのストック、現在では個々でストック。

## へ. 木材規格の決定

4 m以上50cm刻み

## 6. 今度の活動

まだ7棟程度であります但实际上に出材の経験をしたことで、これまでの閉塞感が徐々に解けてきたように思います。

組織を大きくして、集まることすら大変なことにしないで、顔の見える関係を大切にして、何かと言えは寄り合い、実践をもとに検討を重ね、小さいけれど、息の長い繋がりを大切にしてゆきたいと思っております。

（藤生 順朗）